書評　『イラスト授業シリーズ　ひと目でわかる　宇宙のしくみとはたらき図鑑』

著者　渡部潤一監修　東辻千枝子訳

西村昌能（同志社大学嘱託講師）

渡部潤一監修　東辻千枝子訳
創元社／224 ページ
本体 3,300 円＋税／2022 年 7 月発行

おおむかし、小学校 3 年の時に近所の小さな本屋でたくさんの図鑑が並んだ棚を見つけた。その棚に「宇宙のすがた（だったか）」と「原子と原子力（だったか）」という図鑑に目が止まり、親にねだって買ってもらった。それが私の天文学との出会いだった。これらの本は中学に上がっても、ボロボロになるまで寝床で読んでいた記憶がある。

今も立派な図鑑群が書店に何種類も並んでいて、日本は図鑑大国なんだ、と思う。その棚から少し離れたところに、こどもたち向けの図鑑とは少し趣の異なる図鑑を見つけた。それが本書である。タイトルのとおり、写真画像は一切無く、イラストを利用して解説している。最近はハッブル宇宙望遠鏡が撮影した超高細密極彩色画像を見せ続けられ、さらにジェームス・ウエッブ望遠鏡がより鮮明な画像を送ってきている。美しい画像ばかりだ。しかし、しかしである。あの**バーチャル**な画像は情報が多すぎて理解が追いつかない。説明を読んでも心に染みない。

そんな世の中にこの図鑑はあらわれた。写真画像は一切ない。つまり、（たぶん）生の人間の描いたイラストとそれを補う文章だけで構成されているのだ。イラストだから説明したい事だけを描く。そして適切な文字情報。分かるのである。これを今や**リアル**とよぶのであろう。本を見開くとその 2 ページが一つのトピックスとなって完結し、次のページには連続する項目があらわれるというしくみだ。その内容たるや、見て楽しむ図鑑のそれではない。実に奥深く、ほんとうに勉強になった。たとえば、木星の大赤斑の内部構造やタイタンのメタン海の構造、これはイラストでないと分からないはずだ。

残念なところもある。英文原著に原因があると思うが、例えば太陽の中心温度が 1600 万℃と図鑑中の温度表記がほとんど摂氏で表記されていることである。惑星の表面温度は摂氏でも良いと思うが、恒星なんかは K で表示して欲しかった。もう一つある。どこを探しても太陽の表面温度が無い。「炎熱の惑星」と書かれているのに、金星の表面温度が書かれていない。ベネラが金星に降り立って観測しているのに書いてないのである。これらは監修者の渡部さんから出版社の Penguin Random House に伝えて頂いて、次の刷で修正してもらいたいところである。

とはいえ、この図鑑は手元においてじっくり読んでみたい本である。私にとって、お気に入りの**寝床図鑑**になりそうである。皆さんにもお勧めしたい宇宙図鑑である。